NHK特集
妻へ飛鳥へ そしてまだ見ぬ子へ

放送日：1981年2月23日　放送時間：49分

対象校種　小学校高学年　中学校　高校

対象教科　道徳　学級活動　総合

この番組の良さ

● 井村和清さんの生き方

医師・井村和清さんは1977年に大阪府内の病院に赴任しました。長女・飛鳥さんの誕生直後、右膝に悪性腫瘍が見つかり、転移を防ぐため右脚を切断、リハビリを経て職場に復帰しました。腫瘍の肺への転移が見つかり、わずかな時間しか残っていないことを知った井村さんは、妻と娘、そしてまだ見ぬ子に宛て手記を綴りはじめます。井村さんが1979年に亡くなる寸前まで書き続けた手記を、俳優の宇野重吉さんが朗読、医療の仕事に真摯に取り組み、家族を愛した井村和清さんの生きた証をたどります。

● 医師としての井村和清さんの思い

番組は1981年に放送されたもので、ティーチャーズ・ライブラリーのラインアップの中でも古い番組です。番組の中で語られる、子供を思う親としての気持ち、医師として患者に寄り添い、医療そのもののあり方を考える井村さんの姿は、現在でも番組を観る者の心を強く揺さぶります。

執筆者
安来市立広瀬中学校
教諭　瀬崎邦博

番組活用のポイント

● 手記に記された井村和清さんの思いに触れる

あと半年の命であると自ら判断した医師の井村和清さんは、強い意志を持ち、亡くなるまでに幾つかのことを成し遂げました。医師として働ける限り現場で働き続けること、第二子を授かること、妻や子供たちに手記を残すことなどです。手記は井村さんが亡くなった後に出版され、社会で大きな反響を呼びました。

手記には、「心の優しい、思いやりのある子に育ちますように」「倒れても、倒れても、自分の力で起き上がりなさい」など、二人の子供を思う父親としての思いがつまっています。

病人にとって一番苦しいことは、「自分の病気を案じてくれる人がいないこと」であるという井村医師。「患者が頼りにするのは医者」、「医者と患者の人間関係ほど大切なものはない」、「お互いが信じられなくなるような世界になってほしくはない」と述べています。

井村和清さんの親としての思い、医師としての思いに触れ、人間の生きる意味や医療のあり方について考えさせられる番組です。

● 道徳の教材として

中学校道徳科の授業で、例えば「14　家族愛、家庭生活の充実」の項目や「4　希望と勇気、克己と強い意志」の項目、「19 生命の尊さ」の項目として本番組を活用することができます。

子供たちに宛てた手紙に綴られた思いに焦点を当て、手紙に込められた、子供たちを深い愛で包む井村さんの心情に触れることで、親の深い愛情に気付かせ、家族との関係を大切にしようとする態度を育てる題材として活用することができます。

番組では取り上げられていませんが、井村さんは『あたりまえ』という詩を書いています。これまでも道徳の授業の導入や終末でよく使われてきたものです。出版されている井村さんの手記『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』(祥伝社)の中にあります。参考にするとよいでしょう。